寺田先生と銀座

中谷宇吉郎

青空文庫

寺田寅彦先生の連句の中に

　春の夜や不二家を出でて千疋屋

という句がある。

「銀座アルプス」や「珈琲哲学序説」などでよく分るように、先生は銀座へよく出かけられた。

先生は、毎日のように、十一時半頃になると、実験室へ顔を出され、「ちょっと失敬」といって、銀座へ出かけられた。そして※月か不二家で、ゆっくり昼飯を食べて、珈琲をのんで、銀座をぶらぶらして、三時頃にまた理研へ帰って来られた。後には、銀ぶらのかわりに、映画を覗くか、玉を突かれた。いろいろな映画論は、それから生れたのである。

先生と銀座については、妙にはっきりした印象が、一つ残っている。それは先生と、千疋屋でメロンを食べた場面である。考えてみると、もう三十年以上の昔の話であるが、メロンという西洋の非常に高貴な果物が、その頃初めて、千疋屋で売り出された。何処の帰りだったか忘れたが、或る夕方、二、三人の教室の連中と、先生につれられて千疋屋へはいった。

「何にしようか」と見廻すと、いろいろなものの名前を書いた白い紙片が、たくさんぶら下っていた。その中に「メロン五十銭」と書いたのがあった。メロンの名前は、もちろん知っていたが、それは遠い世界の話で、自分でメロンを食うなどということは、思いもつかなかった。だいたい五十銭という値段は、大学前の洋食屋で、毎日食べるランチの、二日分である。それで先生が「どうです、諸君、メロンを食べてみませんか」といわれた時には、思わずドキッとした。

持ち出されたメロンなるものは、厚さ一糎くらいの薄緑の薄片である。今から考えてみれば、ごく普通のマスクメロンを十六人前くらいに切ったものであった。しかしこの初めて見るメロンは、外側が浅い鮮かな緑色で、それが内側の橙色にとけ込んでいる様子が、如何にも美しく、また高貴に見えた。

初めてではあるが、大体見当はつくので、内側からスプーンで削って食べ始めた。まくわ瓜の味を少し淡くしたようなものであったが、これがメロンの味かと思って注意して食べた。三分の二くらい行って、まだ軟い部分が大分残っていたが、こういう高貴なものは、そう下品に食べては悪いと思って止した。他の若い連中も皆そうした。

ところが先生は、ずっと皮に近いところまで、削りとって食べられた。そしてひょっと私たちの皿を見て「君たちは、メロンは嫌いですか」ときかれた。一同はあわてて「いいえ」といって、また残りのところを食べた。

（昭和三十年二月一日）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店
　1988（昭和63）年9月16日第1刷発行
　2011（平成23）年1月6日第26刷発行
底本の親本：「百日物語」文藝春秋新社
　1956（昭和31）年
初出：「銀座百店」
　1955（昭和30）年2月1日
入力：門田裕志
校正：川山隆
2013年1月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寺田先生と銀座

中谷宇吉郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/